

京都ゆかりの絵画

西田家旧蔵の作品には、花鳥画を得意とした四条派の松村景文、円山応挙の流れをくむ吉村孝文や中島来章、また岸駒は勇猛な虎を描いて名高い人ですが、彼の娘婿の岸良など、京都の絵師の作品もあります。四季の花や鳥を主題とした作品が多く、それらが飾られた座敷には、豊かな季節感が創出されたことでしょう。



孫悟空図
大原呑響筆

江戸時代
本館蔵(前田美希氏寄贈)
陸奥出身の大原呑響は、漢学や芸術にも通じ、江戸や京都、大坂へ出て様々な文化人たちと交わりました。蝦夷の松前藩主に招かれて北方の警備や治世への意見を聞かれたこともあり、本図は孫悟空を描いた作品です。吐いた息をよく見ると、口元では点だったものが、次第に姿を現わし、頭上では猿の姿になっています。孫悟空お得意の分身の術を披露している場面です。



滝鯉図 中島来章筆

江戸時代
本館蔵(前田美希氏寄贈)
江戸時代末期の京都を代表する絵師のひとり中島来章の作品です。本図は滝を上る鯉が描かれており、いわゆる登竜門の故事から出世をイメージさせる縁起の良い画題となっています。リアルな雲田気を持つ鯉の姿、金泥で縁取られた鱗、波の形状など、来章の師であった円山応挙の影響がみられる作品です。

その他の主な展示作品

作品名称	作者	年代	員数	所蔵
寿老人図	森一鳳筆	江戸～明治時代	1幅	本館蔵(前田美希氏寄贈)
雲竜図	西山芳園筆	江戸時代	1幅	本館蔵(前田美希氏寄贈)
花鳥図屏風	松村景文筆	江戸時代	6曲1隻	本館蔵(大路常次氏、武内文子氏寄贈)
月竹図屏風	吉村孝文筆	江戸時代	2曲1隻	本館蔵(大路常次氏、武内文子氏寄贈)

謝辞 作品をご寄贈いただきました、大路常次様、武内文子様、前田美希様に厚く御礼を申し上げます。

大阪歴史博物館 Osaka Museum of History

〒540-0008 大阪市中央区大手前4-1-32
電話 06-6946-5728 FAX 06-6946-2662
http://www.mus-his.city.osaka.jp/

特集展示 銀行重役のコレクション —京・大坂の近世絵画を中心に—

会期：令和5年1月25日(水)～3月21日(火・祝)
会場：大阪歴史博物館 8階 特集展示室(常設展示場内)
展示担当：岩佐伸一

開館時間：午前9時30分～午後5時
※入館は閉館30分前まで

休館日：毎週火曜日
※3月21日(火・祝)は開館

観覧料：常設展観覧料でご覧になれます。
大人 600円(540円)
高校生・大学生 400円(360円)
※()内は20名以上の団体料金
※中学生以下、大阪市内在住の65歳以上
(要証明証提示)の方、障がい者手帳等をお持ちの方(介護者1名を含む)は無料



特集展示

銀行重役のコレクション

—京・大坂の近世絵画を中心に—

令和5年 2023 1月25日(水)～3月21日(火・祝)

(3月21日(火・祝)は開館)

火曜日休館



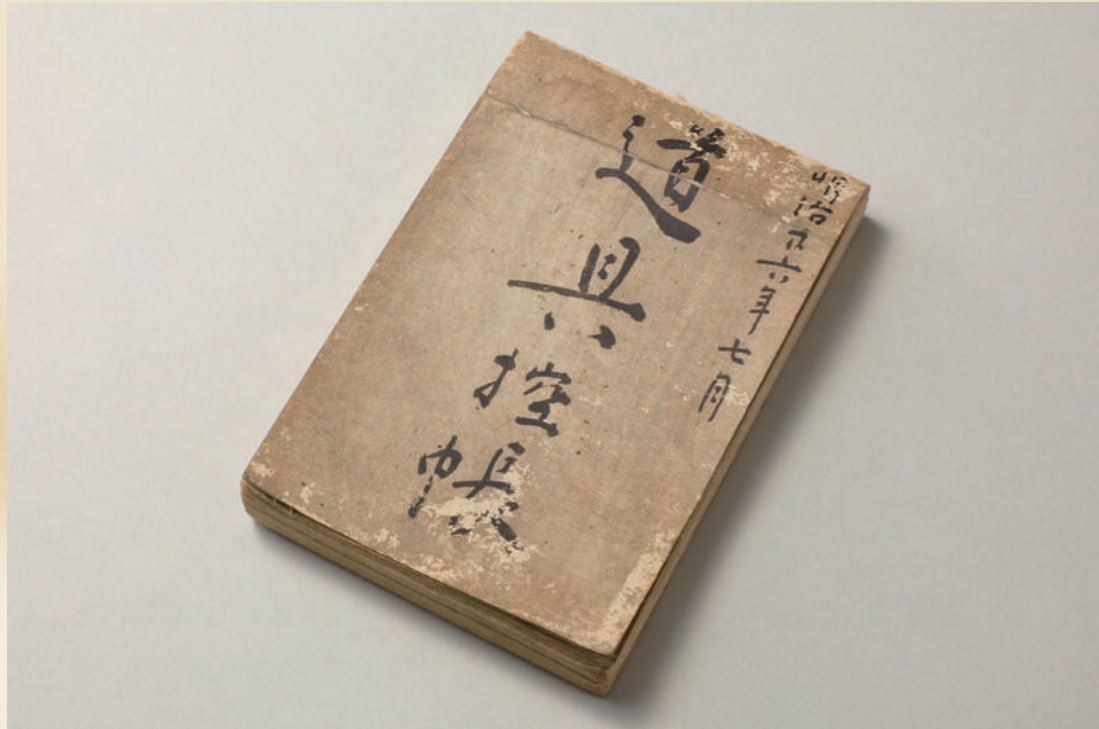
月下兔図 西山完瑛筆
明治23年(1890) 本館蔵(前田美希氏寄贈)

大きな月の下に2羽の白と黒の兔がいます。丸々とした愛らしい姿は、江戸時代の絵画に新風を吹き込んだ円山応挙の作品に学んだものです。作者の西山完瑛は大阪で活動し、絵画のみならず儒学や漢文学にも通じていました。本図は寅年の年11月の作と記されていますので、翌年の卯年のために描かれたのでしょうか。

大阪歴史博物館

西田家の所蔵品

大阪の山口銀行の重役を務めた西田家には明治 26 年（1893）7 月との墨書がある「道具控帳」が伝わっていました。これには同家が所蔵していた掛軸類が列挙されており、今では伝わらない作品も含めて、当時の西田家のコレクションを知ることができます。その多くは京都や大坂の円山派や四条派の作品ですが、狩野探幽や常信などの狩野派の作品、鳥文斎栄之の春画など、江戸の地で活躍した絵師の作品も記載されています。



西田家道具控帳

明治 26 年（1893）7 月
本館蔵（前田美希氏寄贈）

西田家収蔵の掛軸類約 100 点が記載された冊子です。江戸時代後期以降の京坂の写生画系絵師による花鳥画が多くを占め、西田家における調度品としての絵画がどのようなものであったのかを知ることができます。



美人図 宮川長春筆

江戸時代
本館蔵（前田美希氏寄贈）

江戸時代中期の浮世絵師宮川長春は、肉筆画を多く手掛け、美人や若衆、遊里を描いた作品が多く残っています。本図にも遊女とそれに従う遊女の見習いの禿が描かれています。遊女は鉄線の花があしらわれた比較的大柄の着物をまとうのに対して、付き添いの禿は、黒が主体の着物で描かれており、両者が対比的に見えます。

大坂（阪）ゆかりの作品

西田家旧蔵の絵画には、江戸時代末期から明治時代前半にかけての大坂（阪）で活動した絵師の作品がいくつも含まれています。猿の絵で有名な森狙仙の孫世代にあたる森一鳳や森寛齋、写生を基にした表現に軽妙さを加えた四条派の西山芳園や西山完瑛らの作品があります。それらは描写対象を的確にとらえつつ、余白を大きく取ることにより、鑑賞者の視線を描写対象に向けさせる工夫もなされています。



涼台俗宴之図 森一鳳筆

江戸～明治時代
本館蔵（前田美希氏寄贈）

屋根の上でしょうか、彼方の山をも望む高い場所に設けられた涼み台では、にぎやかな光景が見られます。三味線を弾く芸妓、へん顔の団扇を持っておどける人物、女性を相手に拳を挑む男性など人それぞれに夏の夜を楽しんでいます。川に浮かんだ船からは打ち上げ花火も上がり、難波橋と思われる大きな橋も描かれているので、江戸時代の大川沿いにあった料亭での納涼風景をイメージして描かれた作品かもしれません。



松に白鹿・松に蝙蝠図 森寛齋筆

明治 22 年（1889） 本館蔵（前田美希氏寄贈）

明治時代には優れた美術家の活動を援助する帝室技芸員制度が設けられました。その最初に任じられた一人が森寛齋で、彼は若い頃に大坂の森徹山のもとで絵を学びました。この作品は、寛齋が帝室技芸員に任じられる前年に描いたもので、長寿をイメージさせる白鹿と福を含意とした蝙蝠を対に描いたためたい絵となっています。